

聶耳（ニアール）——中国国歌作曲者と日本

岡崎 雄兒

一、はじめに

二〇〇八年のオリンピックは、世界人口の五分の一をもつ大国、中国の北京で開催される。オリンピックはこれまで国威発揚の絶好の機会として利用されてきた。表彰台に登壇する覇者は国歌演奏で祝福を受けるが、中国選手の榮譽のために奏でられる国歌は、もともと映画の主題歌であったこと、またその作曲者は日本に亡命中、神奈川県藤沢市（当時は町）の鵜沼海岸で溺死したことを知る人は、日本ではまだ少数である。

日中間の戦争が終結してからすでに六十年近い歳月が流れている。だが中国では今なおわずか二十三歳で死去した聶耳（ニアール）という青年の作曲による抗日戦争をテーマとした映画音楽が国歌として親しまれ、生き続けている。筆者は以前より夭折した隣国の音楽家に関心をもち、関連する書籍を渉猟するとともに、中国でゆかりの地を訪ねるなどしてきた。本稿では若き音楽家が日本でどのような日々を過ごしたのか、またその死を含めこれまで不明確だった幾つかの点を考察した。



「人民音楽家—聶耳」
(玉溪市郵政局発行葉書)

二、来日まで

聶耳は中国国歌の作曲者であり、現代中国音楽の先駆者であるにも関わらず、日本では主要な音楽家事典にその記載はなく、また中国に関する信頼すべき事典『岩波現代中国事典』でもその名を漏らしている。

日本でよく知られた中国の文化人と言えば魯迅が良く知られており、中学の国語教科書に取上げられているが、聶耳が歴史の教科書などで取上げられたことは寡聞にして知らない。しかし中国で聶耳の名を知らぬ人はなく国歌^①となつた「義勇軍行進曲」をはじめその歌曲は人びとに愛され歌い継がれている。

では聶耳とはどのような人物なのだろうか。手元の『中国電影大辞典』^②には次のように記されている。

聶耳（一九一二年二月十四日—一九三五年七月十七日）作曲家。原名は聶守信^③。原籍は雲南省玉溪、昆明に生まれる。一九三〇年雲南省立第一師範学校卒業。一九三一年上海明月歌舞団にバイオリン奏者として入団、一九三二年上海左翼演劇家連盟に参加。一九三三年上海聯華電業公司に入り、スクリプターやステージマネジャー、中国電影文化協会執行委員。同年中国共産党に入党。一九三五年上海を離れ、日本を経由してソ連に行く予定であつたが、日本の鶴沼海岸にて遊泳中溺死する。

『母性の光』、『桃李劫』（若者の不運）、『大路歌』、『新女性』、『逃亡』、『凱歌』など七つの映画音楽を作曲し、また『母性の光』、『漁光曲』、『小玩意』（おもちゃ）などの映画に出演した。映画『桃李劫』の中の『卒業歌』、『風雲児女』（嵐の中の若者たち）の中の『義勇軍行進曲』はともに革命歌曲として広く歌われた。

建国後、『義勇軍行進曲』は中華人民共和国国歌として確定した。映画のための作曲以外に現代劇『回春の曲』のため

『さようなら南洋』、『梅娘曲』などの挿入歌を創作、同時に『新聞売りの歌』、『茶摘み歌』など大衆歌曲、さらに『翠湖春曉』、『金蛇狂舞』などの民族器楽の改編曲を行った。その作品は洗練されており、民族の風格をはつきりと表現している。

本稿は聶耳と日本との関係に限定して論を進めるが、生い立ちや来日以前仕事の間であった上海での生活にふれぬわけにもゆかぬので、聶耳の主要な伝記^①などを援用し要約しておきたい。

聶耳が生まれた雲南省は、隣はミャンマーやベトナムに接し北京や上海から遠く離れた西南の地である。

省都の昆明は、標高千八百メートルの高原にある。一年を通じて穏やかな気候で、平均気温も十六度程度と常春の地域である。大自然の奇跡ともいうべき怪石が立ち並ぶ石林や少数民族のメッカとも呼ばれるほど多くの民族が住んでいる地域で、色使い鮮やかな少数民族の衣装は旅行関係のグラビアでしばしば紹介される。日本文化のルーツがあるともいわれ、交通機関が発達した今日、海外のみならず中国国内でも人気の観光地として脚光を浴びている。しかし聶耳が生まれた当時の昆明は中央から遠く離れた辺境の貧しい地であった。

父親は中医（漢方医）で、もともとは昆明から南へ八十キロばかり離れた玉溪県の出身。同地で有名な漢方医であった。玉溪での生活に飽き足らず清の光緒年間末に一家で昆明に移住し、医者を営む傍ら薬店も経営していた。母親は少数民族のタイ族の出身。母が漢族でなく少数民族であったことは聶耳の成長に大きな影響を及ぼすことになる。

二人の兄、聶子明・聶叙倫の書いた回想録^②によれば、母は若くして両親を失い祖父母に育てられたが、大変向学心の強い聡明な人だった。聶耳は五歳の時に五、六百字の漢字を覚えるほど記憶力が抜群で、小学校の成績はトップであったという。これも母親の影響であろうか。

聶耳が生まれた一九一二年という年は、前年の十月、辛亥革命の発端となった武昌蜂起が成功し、同年一月一日、孫

文を臨時大統領に中華民国が成立した。十二世続いた王朝が倒れアジアで最初の共和制国家が誕生した。その後袁世凱が革命乗っ取りを図り、十五年十二月には帝政復活を宣言するに至るが、袁の帝政復活に対する反対運動の大きな波は辺境の雲南から始まった。

聶耳が四歳のとき、肺結核のため父がなくなった。以後聶耳は貧しさという隘路に苦しめられながらも、勉学に励み成績はいつも優秀であったという。

幼い頃から母の影響を受けた彼は、雲南の伝統音楽—民歌や花灯、滇劇（雲南の地方劇）などの民族音楽を好んだ。また隣家の家具屋主人から笛を教わり、その後二胡、三弦、月琴などの民族楽器やオルガンの演奏を学んだ。後に雲南省立第一師範学校では専攻の英語学習の傍らバイオリンを学んでいる。

軍閥同士の争いにより一九二九年七月、昆明の火薬庫で一人余りが死傷する痛ましい事故があつた。聶耳は当局に損害賠償を求める闘争に参加し、そのため軍閥政府からマークされ逮捕の危険に遭遇した。たまたま聶耳の三番目の兄に上海でたばこ店店員の話があり、聶耳が代りに赴くことになった。

聶耳が上海に出たのは一九三〇年七月である。いま上海といえば高層ビルが林立し躍進中国のシンボリックな都市だが、当時の上海はどんな様子だったろうか。外滩と呼ばれる黄浦江沿いの風格を誇る西洋建築群がちょうど建設、あるいは建設されつつあつた頃であり、日本を含む各国の租界が形成され、魔都とも称された不思議な魅力をもつた大都會であつた。

当時日本は第一次世界大戦後の世界恐慌に巻き込まれ、中国への干渉を深めていった時代で、国民の不満を背景に軍部急進派が台頭していた。一九三一年九月には柳条溝での日本軍による鉄道爆破を引き金にいわゆる満州事変が起こり、中国の民衆は抗日に燃え盛っていた。当時、国民政府主席の蒋介石は日本の侵略に対し不抵抗の方針をとつたので、旧満州は日本のなすがままとなり、一九三二年一月には戦火は上海にまで及ぶに至つた。

聶耳はたばこ店が倒産し、歌劇楽団の楽隊要員になるが、その後「ソ連の友社」などに参加して音楽創作活動を開始し、メキメキ頭角をあらわしてゆく。有名な劇作家・田漢の知遇を得た彼は、抗日運動の大きなうねりの中でもとの正義感からくる革命への意識も高まり、当時の進歩的な映画の主題歌・挿入歌を次々に作曲した。その最大ヒット作品が後に国歌となった映画『風雲児女』の主題歌「義勇軍行進曲」であった。

上海の体制側の政治弾圧が、日増しに激しくなり、田漢、陽翰笙ら進歩的文化人が相次いで逮捕され、聶耳にも逮捕の危険が迫ってきた。聶耳はこの機会にかねて念願だった国外に出て音楽の道に精進することにした。党组织は彼が日本を経て欧州に行き、ソ連で学習させることにした。聶耳は牛皮の商売をしている三番目の兄を訪ねることを口実に四月十五日、日本郵船の長崎丸に乗り上海を離れ日本に向かった。

三、日本での日々

聶耳は長崎、神戸、大阪を経て、四月十八日朝、東京に到着した。敵国日本の印象はどうだったのか。以後の聶耳の行動は主に残された日記や手紙によるものだが、残念ながらそうした感想は一切記されていない。

聶耳は、友人の案内でその日のうちに東亜日本語予備校（同年六月より東亜学校に改称）に赴き、授業を聞いた。

この予備校は、中国からの留学生教育に一生を捧げた松本亀次郎がもともと開いた学校で、神田・中猿楽町六番地（現神保町二丁目）にあった。長く総理を務めた周恩来も学んだことで知られる。そのゆかりもあつて現在、跡地の公園（愛全公園）に記念碑が建てられている。

中国からの留学生は、まずこの学校に入り日本語を学んだ後、大学に進んだ。同校にはおよそ四千人の留学生が学ん

でいた。聶耳は翌日入学手続きとり、以後日本語学習とともに撮影所などの視察を行い、歌劇、新劇、舞踊などの鑑賞にこまめに出かけた。大きな音楽会などは見逃すことはなかった。こうした見聞をもとに国内の映画音楽雑誌に寄稿もしている。

また留学生の芸術活動にも積極的に参加した。六月には招かれてそうした留学生の会合に参加し、「最近の中国音楽界の総点検」と題して二時間余に及ぶ講演を行った。そこで自作の『義勇軍行進曲』、『波止場労働者』、『大路歌』を歌った。気迫に溢れる講演だったようで、好評に気をよくした聶耳はその模様を母への手紙に書いている。

さらに日本に滞在する中国の詩人たちの座談会に出席、中国の民間情歌を歌い、次回テーマは「詩歌と音楽の関係」の研究にしようと提案し参加者の賛同を得た。

七月は当時の進歩的な劇団―新協劇団の京都、大阪公演に勉強を兼ねて同行することになっていた。その前に途中にある風光の地を観光することにし、七月八日朝鮮の友人李相南と神奈川県藤沢町に行き、李の友人、浜田実弘の家に宿泊した。

この運命の小旅行だが、聶耳はなぜ鶴沼海岸に行ったのだろうか。それは明治の末年、民国大学の副学長などを務めた黄尊三の留日日記に触発されたからではと筆者は推測したことがある⁶。黄尊三は日本でリゾート地として開発されたばかりの湘南海岸での日々を実に楽しみに書いており、聶耳も実際に死の前日までは充実した日々を過ごしていた。例えば次のような日記の一節。

「鳥のさえずり、隣家の子供たちの笑い声、時計の振り子の音、ねむりこけた彼らの二人のいびき……なんと静かな村里だろう。私はこのようなすばらしいところで、のんびりと過ごすことができようとは思ってもみなかったし、日本人とこのように親しく家に泊まり、食事をするようになるうとは思ってもいなかった」⁷

七月十四日から十六日まで、聶耳は海水浴の合間に来日以来の三カ月の日々を総括し、およそ次のように記している。「日本語の会話能力と読む力は確実に進歩した。たくさんの音楽公演を聞いた。バイオリンを練習する時間も国内にいた時よりも多くなった」

最初の三カ月計画を事前達成し、次の三カ月計画を定めた。それは「日本語の読書能力を養うこと、同時に音楽技術の訓練を強化し、先生についてバイオリンを学び、ピアノを学び和声を学ぶこと」であり、さらに第三次三カ月計画は「翻訳の試作、作曲」、そして第四次三カ月計画は「ロシア語の学習、作品の整理、ヨーロッパ旅行の準備」であった。⁸⁾

四、死をめぐって

七月十七日午後、聶耳は李相南、浜田の親族と鶴沼海岸に行き、そして遊泳中溺死してしまった。

翌十八日、聶耳と同郷の親友で左翼作家連盟の張鶴が知らせを受けて鶴沼海岸に駆けつけた。聶耳の遺体はすでに引き揚げられていて、医者 の 検 視 に よ る と 溺 れ て 窒 息 死 と い う こ と で あ り 、 藤 沢 町 の 町 長 に よ る 死 亡 確 認 証 が 交 付 さ れ て いた。張鶴が誤りがないか棺を開けて確認した後、遺体は火葬に付された。その晩、浜田に「聶耳遭難時の状況」を書いてもらった。

聶耳の死は当時、親しい友人はもとより在日中国人に大きな衝撃を与えた。一報はすぐ上海に伝えられ、その死が悼まれた。留学生たちは房総の館山に海の家を借りており、そこで追悼会を開いた。

しかし日本で聶耳の死は「中国の新進作曲家」の死としてはまったく報道されなかった。当時の新聞を見ると、七月十八日の「東京朝日新聞」に一段見出しで次のような記事が出ている。

民国学生溺死？（藤沢電話）

東京神田今小路中華民国青年會寄宿舎学生聶守信（二四）は十六日午後二時頃神奈川県鶴沼海水浴場で遊泳中行方不明となつたので目下藤沢署で捜査中である。

まず住所が違つている。これは関係者が聶耳が民間の下宿でなく青年会の寄宿舎にいと勘違いしたのだろうか。また十七日でなく十六日と日付を間違えている。「東京朝日新聞」にはその後の追跡記事（遺体発見）はない。また「東京日日新聞」（後の毎日新聞に統合）の同十九日付けには、次のような記事が出ている。

水泳着つけた死体

（横浜発） 十八日午後一時ごろ神奈川県藤沢町鶴沼海水浴場付近に水泳着を着た学生風の溺死体が漂着しているのを発見、藤沢署で検視した。十七日午後二時ごろ鶴沼海水浴場で水泳中行方不明になつた東京神田区神保町二東亜高等学院学生聶守信君（二〇）と判明した。

こちらの記事は年齢を間違えている。また地元紙である「横浜貿易新報」（現在の神奈川新聞）（同十九日付け）に、同じ十七日に鶴沼海岸に近い平塚海岸で五十歳の農民が遊泳中溺死した記事があるが、聶耳についての記事はない。朝日、東京日日とも聶耳の本名が出ているので、上海を中心にその頃中国で大流行している歌曲の作曲者の死とは誰も気

付かなかった。

聶耳の死をめぐることは、当時より単なる溺死説と何者かに謀殺されたのではないかという説があった。謀殺説の根拠はまず子供の頃から聶耳を知る人は、彼は泳げたのだから溺れるはずはないという考えだ。聶耳は少年時代に溺れかけたことがあり、その体験から水泳の大切さを自覚し練習の結果、「遊泳技術は急速に進歩し、背泳やクロールをも習得し、以来聶耳は遊泳に大きな興味を示した」と兄、聶叙倫の手記『聶耳の少年時代』⁹⁾にある。

もちろん泳げても溺れる時は溺れるのだが、ここに当時の時代背景がある。盧溝橋事件の二年前とはいえ、すでに日中関係は一九三一年の満州事変以来、緊張関係が続いていた。中国からの留学生にも監視の目が注がれていた。現に聶耳が東京を離れ藤沢の浜田の家に向かう朝、一緒に行く友人との待ち合わせの間に少年警察官から尋問を受けたことが日記（七月九日）に書かれている。

当時、日本の陸軍憲兵は共産主義運動の弾圧のため活動を行っており、日中間の公安関係者の交流もあった。情報憲兵の塚田誠は、昭和十年五月一日付けで、時の陸軍大臣林銑十郎より、「貴官は上海に駐在しソ連邦の中国赤化策動の状況並に朝鮮民族独立運動の動向を偵諜すべし。服務については中華民國駐在帝国大使館武官の区処を受くべし」との命を受け上海に赴任している。¹⁰⁾

中国からの留学生の多くが監視のもとにあった。孫文以来、日本は中国革命の基地であったこともあったので取り締まりが厳重だったのはうなずける。聶耳よりも以前に留学をしていた人たちは、例えば文芸評論家の胡風は、一九三三年二月の小林多喜二の事件の後、逮捕され相当痛めつけられたことを回想録に残している。

また戦前早稲田大学に留学し、聶耳にも会ったことがあるという文学者李華飛に広島大学の小林文男教授がインタビューしたところ、「聶耳は危険人物としてマークされ、日本の警察の密偵（特高警察）に絶えずつきまとわれていた」という。¹¹⁾

こうしたことから謀殺説が出てくるわけである。しかし日本では、後に述べるように早くから聶耳の紹介者として知られる秋田雨雀も謀殺説を述べたことはない。戦後、地元鶴沼海岸に居住して聶耳の事績を調べたマルキスト福本和夫や岩崎富久男明大教授は、そのような説があることをふまえ地元の古老にいろいろ聞いたところ、そのような説は当然としてゐる。¹³⁾

しかし、中国ではそうでないようで、筆者の若い友人は聶耳の名前を出すと、日本で殺されたという説がありますとすぐ反応した。しかし教科書などをはじめ中国で聶耳について書かれた刊行物に謀殺説は出ていない。多くは大波にのまれ溺死したという記述であった。

ところが十年ほど前に出た『聶耳傳』¹⁴⁾には謀殺説が出てくる。聶耳の同郷の友人だった張鶴が悲報を受けて鶴沼海岸に駆けつけたことは先に記した。同書では、はじめに彼が浜田に書いてもらった「遭難時の状況」を紹介している。浜田の文章はこうだ。「聶君の遺体は、ごく普通の溺死体のようでした。見苦しいところもなく、水も飲んでいませんでした。ただわずかだが口の中から血が流れており、頭から少し血が出ていました。検死の医師は窒息死だと言いました」張鶴はこの「遭難時の状況」を翻訳し、同年十二月に東京で印刷された『聶耳紀念集』¹⁵⁾に掲載した。

「遭難時の状況」の記述では、普通の溺死体で人為的に手が下されての死とは判断していかないが、「ただわずかだが口の中から血が流れており、頭から少し血が出ていました」という個所がやはり気になる。前記、王懿之の『聶耳傳』では、当時の上海の新聞が「遺体には七箇所の流血の痕があった」とか「医者には七箇所の流血が死因だとしている、謀殺は否定できない」とかの記事を載せていることを紹介している。¹⁶⁾

こうした経過を承知して当時千葉県市川市に亡命していた郭沫若（著名な文学者、建国後は國務院副総理、科学院院長など歴任）が、聶耳の故郷、昆明郊外の景勝地である西山にある墓碑裏面に「其何以致溺之由、至今犹未能明焉」（溺れた原因はいまなお明らかでない）と書いたのである。聶耳の原籍のある玉溪の聶耳研究家、崎松もその著書で、「聶耳

の遭難時、一人の中国人も周りにいなかった。だから郭沫若は「溺れた原因はいまなお明らかでない」と書いたのである」と述べている¹⁷。

こうした謀殺説に対し、一九九二年九月二十八日、テレビ朝日が「歌で中国を変えた天才作曲家謎の死」という国交正常化二十周年記念番組を放映した。これに出演した浜田は、「当時確かに秘密警察による謀殺という説があったが、それはまったく考えられない」ときつぱり否定していた。

同じくこのテレビ番組で一緒に海に行った浜田の甥（当時九歳）の松崎厚が聶耳は水泳が苦手だったこと、両手で目と耳を塞いで二度水に潜ったが、三度目は浮かんてこなかったと証言している。テレビのナレーターはこの証言を決め手として、これまで謎であつた聶耳の死がはつきりしたと結論づけていた。なお、松崎はこの放映の七年前、没後五十年を記念して藤沢市が作成したビデオ『ニール物語』（一九八五年二月一日テレビ神奈川で放映）でもほぼ同様の証言をしている。

しかしこの松崎の証言は正確ではないと考える。直接その場で見ていたように語っているが、ではなぜすぐ叔母たちにこの大事を知らせなかったのか、この日、聶耳とともに潜って遊んだのだろうか、聶耳の最後を松崎少年は見えていなかっただろう。浜田はこの日海に同行しておらず、聶耳とともに海へ行ったのは、朝鮮の友人―李相南、浜田の姉、松崎少年の三人である。浜田は姉から様子を聞き、「遭難時の状況」で、「海では李君はただ一人で泳いでいました。聶耳は胸のところが浸かる位の深さのところ、一人で波乗りジャンプをして喜んでいました。その時姉は浅瀬に厚を呼んで一緒に泳いでいました」と書いている。

謀殺説を主張するわけではないが、松崎少年の証言をもつて謀殺説を否定する不正確を指摘したかったのである。なお松崎は、その後聶耳の小説的伝記を書いた斉藤孝治の取材に対し、「その後、私は秀子叔母に呼ばれ叔母といっしょに浅瀬で泳いだのです。だから聶耳さんが溺死した瞬間の状況は分かりません」と、今度ははつきり離れていたと述べて

いる。¹⁸

次に当日の天候、波の様子について。浜田の「聶耳遭難時の状況」では、「その日は風波がかなりあつたのですが」とある。ところが同じ浜田の、一九七八年七月一六日に日中友好協会の集いで行つた発言では、「その日は波も静かだったので心臓麻痺ではないかと思ひます。巡查もそのように言つていました」となつており、大きな食い違ひがある。先のテレビ朝日の番組では、横浜気象台の記録として十七日午前七時二十三分、風力一・〇メートル、無風状態と伝えている。

浜田の文章をふまえてであろうか、鶴沼海岸の聶耳記念広場にある元藤沢市長・葉山峻の碑文「つゆ明けと聶耳」²⁰には、「七月十七日午後二時頃、かなり波の高い日であつたが、彼は沖へと泳いでゆき不帰の客となつた」とあり、また同じく葉山の「半世紀をこえて甦る聶耳」¹⁹にも、「高波にのまれてしまつた」の記述ある。聶耳が遭難した時の波の状態については、昆明の墓所脇にある聶耳記念館の説明では「汹涌（逆巻く）波に命を奪われた」と記し、また玉溪の聶耳公園にある記念館の説明にも同様の記載がある。またそれ故にか中国の出版物はその多くが、汹涌（逆巻く）波にのみ込まれとき記述している。²¹これはみな浜田の「遭難時の状況」の影響であろう。

聶耳の日記及び手紙を改めて読む中で、私は彼の死は謀殺ではなく、また大波にさらわれたわけでもなく、たまたま深みにはまつたが体調が悪かつたため心臓麻痺を起し溺死してしまつたのではないかと考える。筆者は近くの海岸で育つたので承知しているが、江ノ島を境に片瀬西浜、つまり鶴沼海岸側は遠浅だが、海底に凹みがあり海水浴シーズンの水死者も東浜側に比べ多かつた記憶がある。

聶耳は死去の一年八カ月前、一九三三年十一月五日の日記に好きだつた鉄棒からふざけて転倒した顛末を書いている。この時は一時仮死状態なつた。それで降折りにふれて頭が痛かつたり、眩暈がしたり、長い間健康不安に悩まされた。暑さや疲労に弱くなつたようだ。一九三三年十一月五日の母に宛てた手紙で、脳神経の異常について赤裸々に記しており、これでは母親に心配を与えるだけではないかと訝るほどだ。

もともと持病ともいふべき弱みを抱えていたところ、訪日後三カ月が過ぎ、自分自身で決めた計画が無事終了し、ほつとした心の隙が心臓麻痺を不幸にも起したのではないだろうか。筆者の考えがどれほど説得力をもつか分からぬが謀殺説がいまなお存在し、日本、日本人に対する不信感を与えていることは残念としか言いようがない。

なお本稿冒頭であげた魯迅について、日本人医師による誤診説、更には暗殺説が蒸し返されている。近年では、『読売新聞』（二〇〇一年五月十六日）が魯迅の息子が雑誌に発表した文章を紹介して魯迅夫人も最晩年まで主治医であった須藤五百三医師を疑い続けていたことを伝えている。この話は一九八〇年代にも提起されたことがあり、関係者による反論の結果、収まったが、日本の侵略が中国の人たちに与えた日本、日本人に対する不信感の根強さを物語るものと言える。²³

五、秋田雨雀との関係

聶耳が溺死した鵠沼海岸にある聶耳記念広場には、秋田雨雀の次のような碑文²⁴が掲げられている。

聶耳を記念する

ここは中華人民共和国の作曲家聶耳の終焉の地である。彼は一九三五年七月十七日暑をこの地に避け水泳中突然波間に姿を没し不帰の客となった。聶耳は一九一二年中国雲南に生まれ欧陽予倩先生に師事し二十数年の短い生涯の間に中国民衆の労働を歌った大路歌、碼頭工人歌等の大作を残した。現在中華人民共和国国歌となっている義勇軍行進曲もまた彼の作曲になるものである。耳を傾ければわれわれは今なお聶耳のアジア解放の声を聴くことができるであろう。こ

こは聶耳の終焉の地である。

一九五四年十月

秋田雨雀は、明治末年から昭和にかけて活躍した劇作家で大正の中期よりしだいに社会主義思想に傾きプロレタリア演劇運動に力を注いだ。田漢や欧陽予倩など中国の作家、劇作家と親交を結び、若い中国演劇人の日本での活動に支援を惜しまなかった。日本に留学していた中国の留学生の多くが秋田に世話になったことを記している。(例えば留学生たちの回想録を集めた『わが青春の日本』参照 東方書店 一九九二年) こうしたことや、この碑文を書いていることから、秋田と聶耳は生前、親交があつたように日中それぞれの書籍などに記録されている。

広場にある葉山峻の「つゆ明けと聶耳」にも「東京で交わつた新劇運動の友人秋田雨雀先生」とある。この年、雨雀はすでに五十三歳、日本演劇界の大御所的存在であつた。友人はともかく本当に交わりはあつたのだろうか。

聶耳は子供の頃から日記をつけており、日本でもつけている。しかし新しい環境に置かれ日記の素材にはこと欠かなくなつた。だろうが、忙しさからか四月十六日の上陸以来、死去の前日七月十六日までの日本滞在全九十二日間で、最初の八日間と七月八日以降の九日間及び六月二十五日(それまでの欠けていた日々についてかなり長文の記録を残している)の十八日分しか残念ながら記していない。それでも当時の生活を知る貴重なものである。またこの間書いた手紙が六通残されており、これらはいずれも『聶耳全集』に収められている。これらの日記・手紙を見る限り聶耳が秋田に会つた形跡はみられない。

一方秋田であるが、これは聶耳とは較べものにならないほど几帳面に日記を残しており全五巻の日記が出版されているほどだ。

秋田の日記には、聶耳の東京着の四月十八日以降、死去の七月十七日までまったくその名は出てこない。秋田が顧問

をしていた新協劇団の秋田自身も同行した関西公演に聶耳は鶴沼での滞在の後、参加する予定だった。にも関わらず、聶耳の死の後、日記に聶耳の名は出てこない。秋田の日記に聶耳の名前が初めて出るのは十一月二日のことで、「新協劇団の北村君、中華民国の一青年を連れてきた。この夏鶴沼で溺死した支那の有名な音楽家聶耳の話をしていった。何か短い感想を書くようにたのんでいった」として聶耳の簡単な事績をメモしている。²⁵

続けて同月七日に新宿明治製菓で中華戯劇座談会に招待されたことが書かれ、その席で『大路歌』『漁光曲』を聞かされた秋田は十一月三十日の日記に、『日本における支那現代劇運動について』を十一枚だけ執筆した。鶴沼で死んだ聶耳という中国の天才音楽家のことを最初に語り、第二には東京における中国演劇運動について、第三には三つの劇団活動について紹介批判を試みた²⁶とある。この原稿を朝日新聞に十二月一日に持ち込んだ。

朝日新聞はこの原稿を十二月二十一日、二十二、二十三日の三回に分け、二十一日に「天才作曲家聶耳の死」と題した(二)を載せた。その中で秋田は、「現代中国の天才作曲家といはれる聶耳といふ人は今年七月十七日パリ留学の途上、神奈川県鶴沼海岸で——(中略)——ついに世界的な評価を得た『漁光曲』の作品を完成し『大路歌』『開路先鋒』の雄大な行進曲を創作し得たのである」とある。

映画『漁光曲』の主題歌——『漁光曲』は聶耳は手伝ったものの、これは友人の任光の作品。本人と会っていたらこのような間違いはしないのではないか、また「聶耳といふ人は」という書き方からはやはり面識がなかった様子が見られる。

しかし、ともかくここに初めて日本の社会に聶耳のことが紹介された。

秋田が戦後、聶耳について原稿を書くのは、一九五五年のことで、「文芸春秋」の二月号に、「アジア解放の聲」という文章を寄せている。これは巻頭にある幾つかの短い文章の一つで、前年の十一月、中国紅十字(赤十字)会会長李徳全女史を迎えて聶耳遭難記念碑の除幕式に参加した時の模様を書いている。ここでは聶耳の直接的な印象は記されてい

ない。次に同年七月十七日の朝日新聞に「聶耳の思い出―死後二十周年に当って」という文章を寄稿している。「聶耳は私たち日本演劇人の親しき友人であり……」とあるものの表題に掲げられた「思い出」らしき記述は一切見当たらない。戦前における文章なら、秋田も昭和八年（一九三三年）共産党のシンパ活動で逮捕され、保護観察の身だったので不用意に中国の人たちの名前を書かなかつたことは十分考えられる。しかし戦後の朝日新聞の文章は、依頼者側がつけたタイトルかも知れぬが、直接会つたことのある人の文章でないことは明白である。

ところがである。一九六〇年十月二十一日の日記に、「夜中国映画―聶耳（ニエアル）の映画は立派だ。ニエアルは自分を訪ねてきたことのある人。鵠沼で死んだ」とある。ここで秋田ははつきり「訪ねてきたことがある」と書いている。果たしてこれは真実だろうか？それとも言葉どおり訪ねてきたが（折悪しく秋田が不在で）会えなかつたのか。

だがもう一方、これは日記でなく『雨雀自伝』²³では、昭和十年代を回顧し、「このころ、聶耳という中国の革命的な音楽者がパリーの留学から帰つて来て、神奈川県鵠沼で水泳中に突然溺死してしまった。この若き天才的な音楽者の死は、この人を知っている中国および日本の青年たちによって非常に惜しまれたものであつた。聶耳は民国元年に雲南に生まれた人で、歐陽予倩の戯劇学校にも学び、進歩的な作曲家として中国の人々に愛され、労働者の生活を歌つた『大路歌』『漁光曲』等の作曲で有名であり、今では聶耳の歌は中国の国歌とされているということである」と書いている。パリーの留学から帰つてきたとか、先に指摘した聶耳の作品でない『漁光曲』を聶耳の作品と勘違いしている。果たして秋田は本当に聶耳に会つていたのだろうか。やはり会つていなかったとみるべきだろう。

当時日本に留学していた人たち、例えば詩人の林林や文芸評論家の杜宣などの書いたものを含めできるかぎり調べてみたが、両者の接点は見つからなかつた。しかし聶耳は来日後、真つ先に秋田に会つておかしくなかつたはずである。なぜなら聶耳の入党立会人を務めた夏衍や聶耳が兄事していた田漢、欧陽予倩はじめ上海で聶耳の周辺にいた人たちはみな日本への留学経験があり、秋田と親交を結んでいたからである。現に聶耳は欧陽予倩から紹介されて演劇評論家の

林和に会おうとしていた。²⁹⁾

一九九九年に出版された物語仕立ての存文学・馮徳勝著『聶耳³⁰⁾』では、聶耳の下宿に秋田と浜田が訪れ、秋田が「一握りの軍国主義者が広範な日本人民の意思に背き、口では日満親善を言いながら、実際は至るところで侵略と略奪をおこなっている。これは遅からず歴史の懲罰を受けよう」などと話しているが、これはまさに創作に属するものであろう。こうした記述は最近出された本、例えば劉涼著『聶耳³¹⁾』にも同工異曲の表現がある。

六、生活費のことなど

次に聶耳の東京での生活ぶりについてである。彼は上海時代の貧しい生活から一転して仕事もせず、毎日日本語学校に通う傍ら映画や演劇を数多く鑑賞し、また近場とはいえ各所に出かけている。学費や生活費はどうしていたのかという疑問が当然起こる。これについて作曲家の團伊久磨が、当時東京で演劇活動を行い秋田なども付き合っていた杜宣に聞いた話を紹介しておきたい。杜宣によれば聶耳は七百円という当時にしては大きなお金を常にバイオリンケースの中の小物入れのボックスに入れていたという。³²⁾

聶耳の東京での四月二十二日の日記に銀行にお金を下ろしにゆくところがあるが、この時に送金されてきたのだろうか。

七百円といえば大金である。昭和十年当時の大卒の公務員給与が七十円、下宿（賄い付）が三十円前後、劇場での入場料がこれは幅があるが五十銭から五円程度だった。³³⁾

聶耳自身の日記によれば、家賃が六円四〇銭、映画館の入場料が一円、バスの乗車料が六銭という時代だった。この大金全部を聶耳が出国前の友人たちからかき集めたとは考えにくい。映画『風雲児女』の監督を務め、日本留学の先輩

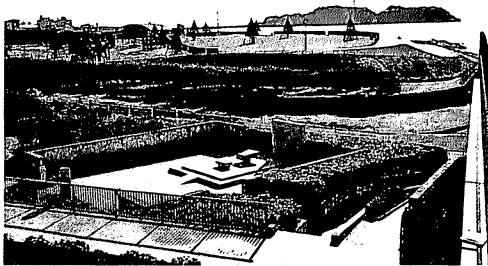
である許幸之の回想録に、許が迫害を受けた自身の経験から聶耳に日本ではなく欧州行きを勧めるくたがある。費用が余計掛かるという聶耳に、許が「もつと仲間にカンパして貰えばよいでは」と言うと、聶耳は「仲間はみんな金のないプロレタリアートではないか」と応じている。團伊久磨は聶耳の入党に立ち会った夏衍の話として、上海の党組織は聶耳の出発の二カ月前に破壊されていたが、ブラックリストに名が載っている聶耳を国外に脱出させるための費用を出す力は具えていたと紹介している。

七、記念碑建設の由来

次に藤沢における聶耳記念碑について、その建設にいたる経緯についても確認しておきたい。

鵠沼海岸に聶耳記念碑が建設されるきっかけは、これまで前藤沢市長の葉山峻の書いた本から彼の母―葉山ふゆ子が中国の英語雑誌を見て聶耳のことを知り、地元で中西功らと記念碑建設運動を始めてからだとしている。その影響からであろう中国で出された伝記、例えば王懿之の『聶耳傳』や王之平『聶耳・国歌作曲家』にも、そのように書かれている。

しかしこれはどうやら不正確で葉山ふゆ子が翻訳したのは間違いないようだが、戦前の左翼運動で一世を風靡した福本イズムで知られる福本和夫が中国の隔月刊雑誌、『人民中国』英語版を見て葉山ふゆ子に紹介したのがきっかけのようだ。藤沢在住の



聶耳記念碑―藤沢市鵠沼海岸

相模女子大教授などを務めた高木和男が『鶴沼海岸百年の歴史』で、当初中西功、葉山ふゆ子が始めたと言いたが、後にそれが誤りで福本がきっかけであったと書き直している。¹⁰⁾

葉山は市長として、また聶耳記念碑保存会会長として聶耳記念碑の整備や聶耳をゆかりとして昆明市との友好都市提携に尽力したが、この建設運動の発端が名の知られたコミニストから始まったのでは立場具合が悪いと考えたのだろうか。しかし一九八五年に藤沢市が作成したビデオ『ニール物語』のインタビュでは、葉山は福本が見つけた雑誌を母が訳したと正確に述べている。

福本和夫は戦前日本共産党の幹部であり、獄中十四年の闘士であつたが、一九四二年保釈後、四十七年より藤沢に住居、日中友好協会藤沢支部創設に尽くした。

昨年秋季より、国立国会図書館の所蔵図書を検索が容易に出来るようになり、福本和夫が雑誌『改造』（一九五四年十二月号）に「聶耳の記念碑―日本で溺死した新中国の国歌作曲者の生涯」という文章を書いているのを見つけた。福本はここではつきりと経過を述べている。それは彼が藤沢市民として、また日中友好協会の一会員として一九四九年十一月七日、ロシア革命記念の夕べの会合で司会を務めた際、聶耳の略歴を説明して記念碑建設の提案を行い満場一致の賛同を得たとしている。

また彼は一九五〇年七月に開催された日中友好会議（日中友好協会設立のための準備会議）の際、藤沢支部の代表として参加し、飛び入り動議として聶耳記念碑（建設）の提案をしたという。その後設立された日中友好協会内部に建設実行委員会ができた。福本も地元の市議員に建設を働きかけたが誰一人として熱心に乗り気になつてくれる人はいなかったという。

その後、中国紅十字（赤十字）会会長の李徳全女史の来日が伝えられるなど情勢が変わりかけてくると、「知恵者はこぞつて、われおくれじと動き出してくる。この機会を逸せず敏捷にとらえるのが政治家の手腕というものであろうか」

とその後のトントン調子で建設が進められたことを喜びながらも、「この計画のそもその由来とその経緯も忘れないで欲しい」と記している。福本はここで葉山ふゆ子の名を出していない。

しかし、福本が、私は『人民中国』（英語版）で知ったというが、聶耳の事績が掲載されているのは、六月号であり、五十年の七月はともかく、四九年に提案したというのは勘違いとみる。福本は雑誌『人民中国』がきつかけと考えているが、それ以前に秋田あたりから聶耳のことを聞いていたのではないか。秋田は戦前、日本共産党のシンパで黨員ではなかったが、戦後一九四九年一月には入党しており、福本も同じく一九四九年八月、こちらは復党しているからである。共に新中国への強い関心を抱いていた同士であるので両者の接点はあつただろう。

聶耳の遭難記念碑は、小田急電鉄の「鵜沼海岸」から海岸に向かつて進み、国道一三四号線の歩道橋を渡るとすぐ左にある。最初の記念碑は、一九五四年十一月一日に、李徳全女史を迎えて除幕式が行われた。場所は現在の場所とは対岸の引地川右岸であつた。このときは木製の遭難記念碑とブロンズ製の秋田雨雀の碑文のみであつた。

この碑文が盗まれたり一九五八年の狩野川台風による大波のため流失したので、その後再建運動が起こり一九六五年四月、新しい碑が設置された。耳の字を真似た花崗岩の碑で百日紅の木を背後にしたこの碑を設計したのは、山口文象である。山口はドイツで建築学を学び一九三二年帰国、黒部川第二発電所、今は取り壊された日本橋の白木屋百貨店などの設計をした建築家だが、聶耳の友人だつたとされ、中国の本にも紹介されている。秋田同様、これは事実だろうか。子息の山口勝敏によれば、「生前仕事については一切話をしない父だつたので分からないが、もし接点があるとするれば、左翼運動をしていたので知り合ったのかも知れない」とのことであつた。

八、おわりに

厳しい時代環境にあつて聶耳の日本での日々は、自分をより大きく成長させるため勉強ができる充実したものであつた。また湘南海岸での毎日は、これまで聶耳が過ごしてきた日々と較べ、安らぎに満ちたゆつたりとしたものであつたことがうかがわれる。その心の一瞬の隙が不幸を招いてしまった。

福本和夫は芸術家には若くして死んだ天才がまれではないとして、源実朝、石川啄木、中国唐代の詩人・李賀を先の『改造』への寄稿の中であげているが、確か作曲家の福永陽一郎がどこかで述べていたように、同業としては滝廉太郎をあげぬわけにはゆかない。「春のうららの隅田川……」で始まる日本の歌曲第一号の「花」。勇壮無比の「箱根八里」、日本の名曲として海外でも人気の高い「荒城の月」、これらいまも歌い継がれている歌曲を作曲した滝も二十三歳で夭折した。

しかしふたりの大きな違いは、滝が恵まれた環境で育ち、東京音楽学校（現東京芸術大学）に学び、わが国初の国費ピアノ留学生としてドイツに留学したことに較べ聶耳は貧しい少年時代を過ごし、長じては亡命を余儀なくされるといふ違いだろう。滝は日本人の心に沁みる音楽を紡いだのに対し、聶耳は中国版「ラ・マルセイエーズ」を作曲、中国の民衆の戦いを鼓舞激励してまさに歌で中国革命を成就させた男である。

本稿はこれまであまり追求されてこなかった死をめぐる問題や戦前の左翼文化人の代表―秋田雨雀との接点の有無などを検討してきた。わが国では聶耳研究はまだ緒についてばかりであり、より精密な研究の進展が期待される。

それにしても同じ中国革命に功績があつたとされる魯迅と較べ中国における聶耳の遇され方が寂しく感じられる。上海の魯迅博物館は最近非常に立派になつた。聶耳の方は墓所のある昆明、原籍がある玉溪の記念館ともみすばらしい限

りであり残念である。

日中戦争が事実上終結してからすでに五十八年が経過し、聶耳の義勇軍行進曲が誕生して六十八年の歳月が過ぎた。この歌がこれから先も国歌としていつまでその生命を保つのか分からない。しかし中国の辺境、昆明で生まれ、革命に貢献した歌曲を次々に作曲し、その影響力ゆえに国を追われて亡命の旅の途次、湘南海岸で若い生命を閉じた音楽家の生涯を我々はもつと知るべきではないかと考える。

注釈及び引用

- (1) 一九四九年九月、中華人民共和国建国にあたり暫定国歌に指定、一九七八年三月、正式に国歌として指定される。
- (2) 「電影」は映画の意味。上海辞書出版社 一九九五年 七一〇頁
- (3) 聶耳という名は、聴覚が鋭く少し聞いた旋律でもすぐ口ずさむことができたので友人たちが「耳さん」という二ツクネームを奉ったことによる。
- (4) 王懿之『聶耳傳』上海音楽出版社 一九九二年、向延生「中華人民共和国国歌的作曲者——作曲家聶耳」『中国近现代音楽家傳』第2巻所収 春風文艺出版社 一九九四年 二一四—二三四頁
- (5) 「回憶我們的四弟聶耳」『人民音楽』一九五五年 十月号 九頁
- (6) 岡崎雄兒『神奈川の中の中国』東方書店 一九九八年 十二頁
- (7) 『聶耳全集』《聶耳全集》編集委員会編 文化芸術出版社・人民音楽出版社 一九八五年 五三六頁 翻訳にあたり『聶耳物語』（聶耳記念碑保存会 一九八九年）を参考にさせていただいた。
- (8) 『聶耳全集』五四二頁

- (9) 『少年時代の聶耳』邦訳 聶耳記念碑保存会編 一九八四年 五三頁
- (10) 塚本誠『ある情報将校の記録』中公文庫 一九九八年 一六一頁
- (11) 胡風は魯迅に近かった文芸評論家、慶応義塾大学に留学。一九五〇年代の反右派批判で失脚した。『胡風回想録―隠蔽された中国現代文学史の証言』南雲智監訳 論創社 一九九七年 十八―十九頁
- (12) 小林文男『日中関係への思考』劉草書房 一九九三年 九七頁
- (13) 福本和夫「聶耳の記念碑」『改造』一九五四年十二月号 一三二頁、岩崎富久男「一九三〇年代の『抗日救亡』文化―聶耳と抗日救亡歌曲運動」『明治大学人文科学研究所紀要』一九九九年 五六頁
- (14) 前出³⁾ 王懿之『聶耳傳』三一〇頁
- (15) 『聶耳記念集』は日本ではほとんどその存在が知られていなかった。それが一九八五年に没後五〇周年を記念して大掛かりな取組みをして出版された『聶耳全集』に『聶耳記念集』の浜田の文章が写真で収録された。なお『聶耳全集』が出版される三年前の一九八二年、『聶耳画冊』（中国芸術研究院音楽研究所編、人民音楽出版社）がこの「聶耳遭難時の状況」を収録しているようだが筆者未読
- (16) 前出¹⁾ 王懿之『聶耳傳』三一〇―三一頁
- (17) 崎松『聶耳与玉溪』民族出版社 一九九九年 一三一頁
- (18) 齊藤孝治『聶耳―閃光の生涯』刊行委員会 一九九九年 五六五頁
- (19) 『日中友好と聶耳の生涯』秋山峰生 日本中国友好協会神奈川県連合会 一九八五年 十六頁
- (20) 聶耳記念碑保存会作成パンフレット（一九八〇年十月）
- (21) 『語りかけることば―パワフル市長の人間賛歌』所収 有隣堂 一九八七年 二三頁
- (22) 前出³⁾ 向延生『中国近現代音楽家傳』（二三三頁）など。なお葉山の「つゆ明けと聶耳」は「聶耳と私」と題して

中国で出版された『永生的海燕—聶耳、洗星海紀念文集』（人民音楽出版社・一九八七年）に全文収録されている。

(23) NHK人間講座「新・魯迅のすすめ—藤井昇三」（日本放送出版協会 二〇〇三年二、三月号一四九—一五三頁及び藤井昇三「謀殺説にひそむ不信感」『朝日新聞』二〇〇三年三月十四日

(24) この碑文はここにあるように一九五四年、初めて聶耳の記念碑が建設された時にできた。三年後の一九五七年八月に何者かによって盗まれ、そのままになっており、碑そのものもその後の台風によって流され、一九六五年再建されたときまた掲げられた。一九八六年現在の新しい聶耳広場ができると、残念なことにこの碑文は、すみの目立たないところに埋め込まれ、その代りに葉山峻藤沢市長（当時）の「つゆ明けと聶耳」という文章が掲げられている。

- (25) 『秋田雨雀日記』第三巻 未来社 一九六六年 五七頁
- (26) 同 六二頁
- (27) 『秋田雨雀日記』第五巻 未来社 一九六七年 三二四頁
- (28) 『雨雀自伝』新評論社 一九五三年 二一〇頁
- (29) 聶耳の日記 前出『聶耳全集』五三四頁
- (30) 雲南人民出版社 一九九九年 四三八頁
- (31) 大象出版社 二〇〇二年 七四頁
- (32) 「四つの耳」『降ってもパイプのけむり』朝日新聞社 一九九四年 二五六、二五八頁
- (33) 『値段史年表明治・大正・昭和』週刊朝日編 朝日新聞社 一九八五年
- (34) 「憶聶耳」『永生的海燕—聶耳、洗星海紀念文集』人民音楽出版社 一九八七年 八四頁
- (35) 前出 二五八頁

- (36) 前出 『語りかけることばーパワフル市長の人間賛歌』 二三頁
- (37) 東亜同文書院出身のコミュニスト、戦後日本共産党参議院議員、著書に『革命の上海で』『死の壁の淵から』がある。
- (38) 「二十世紀文化名人と上海」シリーズの一冊 上海教育出版社 一九九九年 一四〇頁
- (39) 一九五〇年六月十六日発行の二巻二号。書いたのは徐遲(詩人)。なお同誌の日本語版が出るのは一九五三年になつてから。
- (40) 『鶴沼海岸百年の歴史』第二追補補正版、私家本 一九八九年 二四三頁
- (41) 筆者による聞き取り 二〇〇三年三月二十七日

日本人、中国人、生存者、故人をとわず敬称は略させていただいた。また中国図書からの引用は特に断りのない限り拙訳による。